

第 33 期目録委員会記録 No.2

第 2 回委員会

日時：2011 年 5 月 21 日（土）14 時～17 時 30 分

場所：日本図書館協会

出席者：原井委員長，木下，河野，酒見，高橋，鶴田，平田，古川，本多，渡邊  
<事務局>磯部

[配布資料]

1. ISBD 事例集修正メモ（エリア 0 翻訳以外）（3 ページ-A4、渡邊委員）
2. [ISBD 事例集]（16 ページ-A4、渡邊委員）
3. ISBD 統合版エリア 0 用語翻訳案（1 ページ-A4、渡邊委員）
4. ICP における実現形・個別資料の典拠形アクセスポイントの規定に関する質問への IFLA 目録部会の反応（2 ページ-A4、古川委員）
5. 「目録の作成と提供に関する調査」凡例案（4 ページ-A4、原井委員長）
6. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-調査の概要（5 ページ-A4、原井委員長）
7. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 1（4 ページ-A4、木下委員）
8. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 2,3（2 ページ-A4、古川委員）
9. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 4,5（3 ページ-A4、本多委員）
10. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 6-1～6-4（10 ページ-A4、平田委員）
11. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 6-5～6-7（6 ページ-A4、酒見委員）
12. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 6-8～6-10（3 ページ-A4、渡邊委員）
13. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 7-4～7-6（3 ページ-A4、鶴田委員）
14. 「目録の作成と提供に関する調査」原稿案-問 8（5 ページ-A4、高橋委員）
15. 「図書の整理に関する調査 1989」の集計報告及び分析 I 『現代の図書館』28(2)（5 ページ-B4、事務局）
16. 「図書の整理に関する調査 1989」の集計報告及び分析 II 『現代の図書館』29(1)（4 ページ-B4、事務局）
17. 第 32 期目録委員会記録 No.21（3 ページ-A4、事務局）
18. 第 33 期目録委員会記録 No.1（3 ページ-A4、事務局）

[報告事項ほか]

1. 委員の交代：酒見委員が異動のため退任することになり、後任に河野江津子氏（慶應義塾大学メディアセンター）が就任。
2. 東委員の後任は 7 月くらいまでを目途に調整中である。

### 3. 横山委員が退任することとなった。

#### [検討事項]

1. ISBD 事例集の修正について、5月初旬の作業について、渡邊委員がとりまとめた結果の報告があった。ISBD が変わったために修正する部分はなかった。ケアレスミスの修正およびエリア0の翻訳を微修正した。ISBD 本体の誤りについても指摘した。ISBD の事務局に送付済みである。
2. 古川委員から前回、ICP における実現形・個別資料の典拠形アクセスポイントの規定について問題提起があり、IFLA 目録部会に質問を提出した。内容は、6.3.4.4 の見出しと内容が一致しないので、本文を修正すべきではないかという指摘である。それに対して、Tillett 氏は、見出しの修正をするという見解であり、実現形、個別資料にも典拠形アクセスポイントが必要であるとしていることが分かった。基本的に同意するが、IFLA 目録部会からの直接の回答はないので、当委員会から返答メールは送らない。なお、今年度の ICP 総会に委員から出席者はいない。出席できるとしても、正確を期すため基本的には文書でやりとりすることになった。
3. アンケート結果の報告書原稿について、各章ごとに意見交換を行った。次回までに文章を修正し、図と表を入れて持ち寄ることとする。

#### スタイルについて

担当部分は見開きの右側のページにまとめる。基本的には1項目見開き2ページで、担当ごとに偶数になるようにまとめる。カラー印刷は行わないので白黒原稿とする。幅は左右インデントよりはみでないように。

#### 概要

前回のスタイルを踏襲している。調査のねらいは、集計についての箇所を詰める必要がある。出していない館から回答が来た場合の処理など、実態を本多委員から原井委員長に内容を連絡する。調査票の構成について、次回までに意見を原井委員長に提出する。実施上の問題点も、集計した委員から原井委員長に連絡する。

#### 調査対象について

大学図書館と公共図書館という館種によって調査対象数が異なる。公共図書館については、今回中央館に集約しているという前提を最初に説明することとなった。公共については、市町村合併があったので、前回との比較がしにくい。前回よりも回答館数が減っている。

#### 問1(木下委員)

1-1について、前回は付帯調査だったので、蔵書冊数とのクロス集計できたが、今回は別で調査しているので、クロス集計できるのかが課題である。図書館コードと蔵書冊数があれば可能かもしれないので、データは磯部委員が入手する。作

業量をみて掲載するかどうかを判断する。時系列についても検討する。

1 - 2 は記述式。係名の考察の書き方が難しいが、社会状況もわかるので傾向・気づいた点を残す。目録データベース以外の形で提供される資料の整理や目録以外の仕事で何を一緒にやっているのかに着目してみる。

1 - 3 は経年変化を見たほうがよい。

1 - 4 は館種・専任兼任で、特に大きな変化は見られなかった。全体の傾向を示すことにする。

問2（古川委員）

古川委員から前回「わからない」という回答はなかったのかという点の確認があり、本文に手を加えることになった。今回は「わからない」を除いて、前回と比較した。前回の調査に言及する場合、「前回調査」「年調査」で統一することになった。

経年の表は要らないということになった。

問3（古川委員）

3 - 1：典拠コントロールの意識は進んでいることが集計することで判明するのではないかという点で、蔵書冊数とのクロス集計を行うほうがよいとの希望があり、全体での調整・作業量の兼ね合いをみながら、判断することになった。

また、今回は、設問時に典拠コントロールの意味がわかるような説明を加えたので、その点も付記することになった。

3 - 2：問7-4の集計と調整する予定である。公共図書館で216館が「書誌ユーティリティの典拠コントロールを利用している」ことについて、実態は何であるかが問題となった。選択肢にMARCがないためMARC購入あるいはTRCの図書館専用ポータルサイトTOOLiの利用である可能性もあり、書誌ユーティリティではない可能性が高い。コントロールされたデータを購入しているのが実態と推測される。コメントを付加する必要がある。

問4（本多委員）

4 - 1：外部委託について、前回は調査しなかった。1981年調査まで遡る。前回行わなかった理由は判然としないが、この段落の最初に説明することにする。

大学の分析について、本多委員から大学側の意見が求められ意見交換を行った。

明確な理由は述べないが、問1との関連は表現を調整する。

「進んでいる」という表現は価値判断が入ってしまうので、「増加」という表現とする。

4 - 2：請求記号と装備が同じ館で外部委託しているのかは元表を確認する。装備の外部委託については、推測なので削除する。典拠コントロールに関する問題は問3への参照を入れる。

問5（本多委員）

今回 OPAC の種類を細かく複数回答で問うているために、前回との比較が難しい。傾向を文章で記述する。

ウェブ OPAC と館内 OPAC の違いについて意見交換した。

問 6 (平田委員)

表は横組みで構わないことにした。表の名前を入れる。

OPAC が普及したことが前提にあるので、「減少に転じた」という表現を避ける。ピークは何年で、OPAC の提供が一般的になった。開始年ごとの集計ではなく、累積での評価を行う。

4 ページ目の未回答が多いことには触れるが、表現を調整する。

前回より台数が増えている点について、公共図書館の調査の集計の方法が変わった点の注記を入れることにした。大学の前回の 50 以上に対して、最大台数が増えていることに言及する。

タッチパネル・タッチスクリーンの区別の難しさを考慮して、選択肢を調整した経緯がある。メニューと画面埋め込みが今回では選択方式にまとめられている。検索方式は、無指定方式と選択方式の説明を付すことになった。また、前回調査との比較を一部行う。コマンド方式が減っていることを追加する。無指定が増えたとも言える。

問 6 (酒見委員)

6 - 5 : 前回と異なる項目・選択肢の説明を入れる。順番を公共図書館 大学図書館にする。「次世代 OPAC と呼ばれるような機能」の内容をどういう表現にし、注釈をどうするかを検討した上で、ここで記録しておくほうがよい。

6 - 6 : 前回と異なる項目・選択肢の説明を入れる。あまり前回調査結果との違いはみられないことに言及する。

6 - 7 : こちらも前回と大きな変化はなかったが、リンク情報の提供は増えている。数ではなく、OPAC 提供館に占める割合で比較するほうがよいという指摘があった。目次情報・あらすじは分け、目次情報は別項目で言及されているので、「あらすじ」のみでよい。

検索文字種の設問が今回ないことについて、OPAC の箇所ではなく、概要で言及することとした。

なお、表の整形時に折り返し文字に気をつける。

その他

残りは次回に検討する。

東委員分担分は古川委員が、横山委員分担分は鴫田委員が引き継ぐ。

蔵書規模・受入冊数とのクロス集計を木下委員が作業してみた上で、方法手順が

確立したら、各担当が行う。作業量が大きいうдたら、掲載しないこともあり得る。現時点では、クロス集計には着手せず、今回のアンケートの別の設問や前回のアンケートとの比較を行う。

次回以降の委員会の予定

6月18日(土)

7月30日(土)